

花鳥諷詠詩（II）

山口青邨

一口に俳句と言っても種々雑多なものがある、縦に歴史を見ても、横にひろがりを見ても種々雑多なものが流行してゐる。ところが俳句に共通なものが一つある、それは、花鳥風月を吟詠するといふことである、下等な地口、駄洒落を専らにした初期の俳句でも、又、俗情俗事をうたった月並俳句でも、花鳥風月を題材にしないものはない。これは吾等の祖先からの花鳥風月を愛好する性癖が強いのである。萬葉にもそういふことは見えるし、古今集にも、新古今集にもつづいてゐる、足利末葉に連歌から俳諧が生れて、専ら花鳥を諷詠するやうになつた、殊に俳諧の發句、即ち今日の俳句は全く専門的に花鳥を諷詠する文學になつた。

芭蕉も見る所花にあらずといふことなし、思ふところ月にあらずといふことなし、又花鳥に情を勞して暫く生涯のはかりごととする——と言つてゐる。

今日の文壇は小説戯曲の類が盛んである、西洋の文學の影響を受けて長足の進歩をした、いづれも人事の葛藤を寫し、讀者を泣き悲しみ憂へ悶えしめる。今日の文壇は平家に非ざれば人に非ずといふと同じく戯曲小説の類でなければ文學に非ずと言つたやうな勢力である。今日の文壇で花鳥風月を吟詠してをる文學があると言へば、「へえ、そんな文學がまだ存在してゐるか」と嘲笑する人があるだらうと思ふ。老人の暇つぶしだと嘲る人が多いだらうと思ふ、子規は「天下有用の學は僕の知らざるところ」と言つた、子規の口吻を學ぶわけではないが、私達は花鳥風月を吟詠するより一向役に立たぬ人間である、さういふことにしておかう。

自然界はすべて沈黙をつづけてゐる、何物もこつちに向つて話しかけて來ることはしない、然し人間から有情の眼をもつてこれに對すれば自然は直ちに温い情緒を以て人に對してくる。日月星辰、禽獸蟲魚、みなさうである。なまじ人間相互の關係よりもより純粹な心持で吾等に對してくるやうな心持である。廣い文壇にはさまざまなものがあつてよい、人情世相を描き、人事の葛藤を解剖し描寫した戯曲小説の類がさかんなものも結構である、その傍にさういふものから離れて自然に愛情をそそぎ、自然の愛情を享受して自然界を描寫する文藝があつてもよいわけである。

私達は天下無用の徒ではあるが、祖先傳統の趣味をうけついで、花鳥風月に心を寄せる、他日、日本の文學が世界の文壇上に頭をもたげる時、他の國の人々は日本獨特の文學は何かと訊ねるであらうが、その時、こゝに花鳥諷詠の俳句があると名乗をあげることが愉快なことではないか——。

以上は虚子の立つ俳句の基盤である、花鳥諷詠文學の理論である。

（第十七号へ）

山口青邨著『俳句入門』より一部抜粋